明治維新の志士琳瑞和上

石橋誠道

予が曾て東京小石川に居た時、光雲寺主野澤俊岡僧正から、志士琳瑞和上の事を再三聞いた。その當時心竊かに我等に、そんな立派な人のあつた事が悅び、且つ宗内の人々が餘りに能くこの人を知らないといふ事は、甚だ遺憾であると思ひ、何とかして之を表はす必要があると考へた。然しながらそれを發表する機會を得なかつた。所が先年矢吹博士が、大島上人に托せられた琳瑞和上及び行誠上人の書翰をしらべてゐる内に、いよ〳〵和上と行誠上人との關係が明白となり、特に先年、隈川君が隱れたる勤王僧と題して、雜誌宗教界に發表せられた文を參照して、こゝに一文を綴つて諸君に提供した譯である。

東京小石川の傳通院の前に處靜院といふさゝやかな寺がある。この寺は昔し福田行誠上人や、祥道琳瑞和上が住居された寺である。行誠上人が幕末維新の前後に在つて、佛敎の興隆に奮鬪努力せられた事は、今更喋々する必要はないが、行誠上人が最も望を囑された弟子に、琳瑞和上といふ人があるこの人は實に國家を雙肩に荷つて立ち、頽廢せる宗敎を再び挽回せんとする、慷慨悲歌の士、死も敢へて辭せざる傑僧であつた。

琳瑞和上は羽前國村山郡谷地町北口の人で、天保元年十月二十七日に生れ、父は細谷與左衛門守福といひ、祖先已來の資産家であつた。和上の幼名は房藏といひ、與左衛門の第四子である七歲の時故あつて天童老の森の親戚なる西澤忠右衛門の家に養はれ、隣村の久の本星野彥兵衛の家塾に入つて勉强

した。天性聰敏、才識嶷秀と言はれ、如何なるものも一度これを敎ふれば、決して誤ることなしに、これを通讀したといふことである。十二歳の時、實父與左衛門が病にかゝり、病床に呻吟した際には家に歸つてそれを看護し、五年の久しき更らに倦むことなく、父の好みに應じて太閤記、八犬傳、三國志等を讀んで、父の病苦を慰めたといふことだ。けれども琳瑞が十六歳の時、父はこの世を去つてしまつた。この時の琳瑞の悲しみと、將來に向つての煩悶とは、尠からず心を苦めたに違いない。その時琳瑞は斯ふ考へた。「苟くも男子と生れて碌々年月を送るならば犬馬と少しも選ぶ所がない。我今家事に從事するより、寧ろ武士とならふか、投機家とならふか、一層僧侶となつて見よふか」。斯くて琳瑞は種々に考へ續けてゐたが、十七歳の春、無能寺の名僧、矢吹琳堂和上がいたま〳〵天童久の本の常安寺に留錫して、授戒を行はれた事が起つた。琳瑞は此の動機から決然僧侶にならふと志し、竊かに家を出て、常安寺に往き、琳堂和上に面會して、是非とも門弟として下さいと嘆願した。然しながら琳堂和上は、本人の志は解つたが、兩親の意見を尋る必要があるとて、此旨を養父の西澤忠右衛門に告げた。所が西澤家では大に驚いて、琳瑞を說諭したけれども、彼は頑として動かない。西澤家でも手に餘して、早速實兄與左衛門にこの事を告げた。所が兄も大に驚き、直ちに常安寺に行つて西澤家と共に懇ろに諭した。然しながら琳瑞の志を少しも動かすことは出來なかつた。されば彼等はどうすることも出來ないから、遂に琳瑞の意の自由に任せて歸つた。そこで琳堂和上は、いよ〳〵入

門を許されて、剃髪して琳瑞と名け、無能寺に同行さるゝ事となつた。かくて琳瑞は和上に事へ、傍ら佛書の指導を受けた。所が元より漢學の素養のある人だから、忽ち同輩を凌駕して、從つて識見も高まつた。

此頃江戸小石川傳通院内の行戒上人は、淨土宗内は勿論、各宗の間にも名聲嘖々たる高德であつたが、深く佛敎の衰へたのを慨き、僧徒の品性を高め、惰眠を覺醒せんと企て、傳通院内の處靜院を、まづ律寺に改めて、こゝで立派な人物を養成しようと思はれた。ところが中に適當な人物がないので色々苦心して探してゐられたが、ふと無能寺の琳堂和上の事に思ひ及ばれた。當時無能寺は律院でその寺の住職琳堂和上は、道念堅固な非常な立派な人であつたから、若しやその門弟の中に於て、將來有望の人があるなれば、拔擢して立派な人物にしあげて見たいと決心して、琳堂和上に相談された。和上もそれには大に同情し賛成して、その第一の愛弟琳瑞和上を送られた。これは嘉永二年の事で琳瑞は二十歳行誡上人は四十一歳であつた。行誡上人は己れの宿堂の幾分が實現したのを喜んで、處靜院を琳瑞に讓り、無能寺と同く此の寺を戒律の道場とし、當時の僧侶の模範としやうと考へられた。琳瑞も又こゝに宿志の幾分を遂げ得たことを喜び、鄕里の細谷家も亦大に喜ばれた。此の時行戒上人がよまれた述懷がある。

埋火のたえなるを繼ぐ炭はあれどおこすに難しすたれたる道

琳瑞はその後行戒上人、傳通院の玄順上人、車叡山上野の慧澄律師、及び智曇上人等に從つて、宗乘餘乘を研究し、傍ら諸子百家の書を探り、併せて詩文にも達せられた。行誡上人が琳瑞和上の將來に就て望を囑してゐられた事は、行誡上人の書翰に依つて明かである。丁度此の頃の手紙と思はるゝものが今殘つてゐる、よつてこれを記して見よふ。

此度無能寺入佛幷に受戒等有之候よし、急に琳瑞沙彌さし下し申候、全體明年ごろ披露に來られ候樣心得罷在候處、今度幸ひよき織に付罷出委しく演述に及ぶ可く、先以て一律場成就御親處にも嘸々御滿足と察入申候、夫に就ても當時の處創業の織ゆへ所せん法式全備と申には參り不申候へども漸々上野同樣にも進ませ度、正法の弘通も偏に此處をと賴もしく候に付、追々宜しかるべき樣御外護有之度、御さし含のほど御賴申度、是方にても精々如才なく世話は致し候へども、山は高きを厭はず、功德は積むを厭はずと候へば、存ぜられ候まゝ聊か贅言を加へ候、追々秋冷に候、道の爲折角御自愛奉至禱候也　恐々謹言

行誡　敬白

八日望

與左衛門樣もとへ

この書翰に依つて處靜院を律院とされた趣かよく解かるが、從つて琳瑞和上の將來に對する行誡上人の希望も明かにされてゐる。この後幾度か書翰の往復があつたであらふが、かの安正二年の江戸の

大地震の際、和上の實家細谷與左衛門から來た地震見舞の往復の書翰が今殘つてゐる。今下にそれを轉載して見よう、

島屋便に付一筆啓上仕候、寒冷追日相募候得共、益御勇健御座遊され珍重の御儀拜賀奉り候、當方無異儀罷在候間、憚り乍ら御休慮思召下さる可く候、然れば去月(十月)二日御地大地震に付、誠に言語に盡し難き大變驚き入り存し奉候、去月九日御發しの御狀、同月二十二日相屆き候間、取手遲しと拜見仕候處知音の御方々何れも御無難、大慶此上も無く一同歡喜罷在候、私方より去二十二日御尋問の書狀島屋に相屆き定めて相達し候はん、此地は至つて無異に御座候、御安心成し下さる可く、於玉が池一堂先生の御染筆先月相屆き難有拜讀奉り候、御禮金早速差上可申之處、地震咄し旁に付延々今日島屋飛脚便差上奉り候、宜しく御披露願上奉り候、且先日戒法隨身記御送下され難有拜讀奉り候、幷に絹切九枚束條先生の御詩送り下され高橋阿部へも分け遣はし難有存し奉り候、於玉が池書藏類燒相成御祕書類失へ候段風聞有之歎息罷在候、右御樣子御席に仰せ聞かされ度候、

一、先般屏風御染筆御願下され置候由、御狀延着返事上げ不申候、何卒西澤、高橋、阿部、拙家都合四雙末代の重寶に御座候間、偏に御願申上奉候、唐紙は上品に成し下さる可く、御禮金御沙汰次第取集め早速差上奉る可く候、屏風の句私分に相成は先生御作の詩か文楷書に御染筆下され置候はば難有仕合に奉存候、宜く御取斗ひ相成丈御取り急ぎ奉希候、

一、猶亦松田春東御子息春卓は當夏より出府、當時芝田町邊か東條若先生方へ入塾勤學致され、地震の節無難の書狀相屆候間安心仕候、田原大園未だ歸國仕らず當夏以來書狀も參り不申甚だ不實不信のものに付、私よりも一向音信不仕候、併し天童叔母晝夜御案思是には當惑、來春中にても叔母への義理態ざ飛脚相立て可申か斗ひ難く奉存候、

一、金五拾疋　地震御見舞　行誠上人へ
一、同五拾疋　同　一堂先生へ
一、同五拾疋　同　良英琳瑞前へ
一、同五拾疋　同　伊藤儀左衛門様へ
一、同五拾疋　同　青山荻原眞次郎様へ

右御見舞の印迄に呈上奉り候、夫々様へ宜く御披露願上奉り候、追々嚴寒に相成折柄時候御厭ひ遊さる可く、御院主様其外様へも愚書差上申可きの處、取急き其儀に能はず何卒御鳳聲仰上られ下さる可く大亂書御推見奉希候　恐々謹言

霜月二十日　細谷與左衛門

良英琳瑞様　貴下

御見舞の品中水引にて御結夫々様へ御送り披下度願上奉り候、行誠上人の御染筆物小絹切唐紙たん

ざく何れにても詩歌御序の節願上奉り候、小屏風にいたし重寶に可仕候、

右は細谷家から琳瑞和上に差出された大地震の見舞狀であるが、これに對する行誠上人の禮狀を轉載して、當時震災の樣子、及び琳瑞和上に對する行誠上人の信賴の程度の推察を願いたいと思ふ。

其後は暫く御踈音重々打過候、時は甚寒の砌彌御安泰の旨珍重に渡らせられ奉賀候、當地一同無事に罷過候御休意奉希候、扨亦先般は未曾有の地震、其砌は御尋の爲、目錄金五拾疋御惠投入念の事却て痛入候、御かげにて當山幷に弊院抔別して無事に、さしたる損じ場所も無之外にくらべ候へば平生の通りに候、琳瑞沙彌初め一同聊かも怪俄等も無之安穩の趣罷在候、嘸々御聞にては御案じ可有之御事と奉存候、しかし隨分に大變にて當地もまづまづ一變化に候、上下其彌よ窮拙に罷在候、復古と申す事はしばし出來間敷候、扨々無常遷流現前の事のいつ何時の事ともしれ不申ものに候、いまより後生大切に勤め可申事と當所にてもめざめ申すものも少しは有之かに聞及候、時候御尋且御挨拶も申上度書中申演候云云　恐々謹言

十二月七日　　清淨心院　　行誠　合掌

與左衛門樣　御もとへ

琳瑞沙彌事益無事に出精耳心いたし申候、御案下さるまじく候、追々大事成就仕る可き仁物と見請

申候、末たのもしく候、ゆく〳〵奥羽の佛法興隆可申事に存候、御やどにても折角御信心有之樣御世話可有之候

其後文久二年行誡上人は木製の活字にて大般若經の出版を發願せられたが、故あつてこれを果すことが出來なかつた。この頃この經の應募購讀者の勸誘を細谷家へ依賴された消息が今殘つてゐる。これにも琳瑞和上の事が記されてある。

今度活板大般若經新刷三百部の發願申候、緣起は別冊勸進文の如し、其御地も御同緣も有之事故、たとひ一部にても御申遣し成し下され度樣存候に付、今度わざ〳〵申進御聞に入れ候、有信の衆も有之候におひては、幾部にても今の內ならば仰遣され次第差送り可申上候、もはや此節までにて百五六十部うけて出來候まゝ追々かさみ可申事かとも存候、尙他にて御經すり出候儀は、御開國後唯一度にて不思議の事にて風と發心是も可然宿緣か、野拙今度にて此經讀誦四遍にて餘人へもすゝめ讀しめ候もはや餘程にて處靜院も(琳瑞和上)近年よみ終り申候、佛法東漸と申候へは奥羽すじは澤山可有之理に候、委く處靜院より可申演候、處靜院事も追々進學入精にて、當時は傳通院方丈の請にて本坊におひて選擇集講釋に候、律場開創人法相應の段歡喜此事に候、それにても御喜成さる可く候、御一門の人々へも此旨御達し成さる可候、手前も去年は春中相州江の島に籠り、大般若經讀誦、すぐさま上京華項大僧正御遷化、是は法兄の儀にて葬式にも逢ひ申度、しかし所去夏は京都も

ことの外あつく急に發足も致しかね候處講釋賴まれ、五月初より七月中までに、選擇決議幷に起信論と申ものなど講釋、八月初旬よりは大坂より高野吉野當麻南部西京など巡拜、九月中に歸山申候當月中は弟子共命終の者共有之、寺持やら何かと世事少々承り候上に、今度も大般若經さわぎ、しかし始終佛法の事にて急がしく難有御事に候、久々貴意を得ず、いつも御安靜のよし陰ながら御喜申入候、明日たより有之由處靜院今朝申候故、取敢へず般若經の事御勸め申度一封認め申候、表裏墨慵にのみ罷なり例ながら御無沙汰恐入候　恐々謹言

七月七日當賀　　大佛堂　行誠　合掌

細谷與左衛門樣　御つき御中

琳瑞は爾來行誠上人の指導の下に日夜奮勵して勉强を續けた、そうして一切經も凡そ三回程讀んだといふことだ。大般若經の印刷にも尠からず力を盡した。其の間に當時の儒者として名の高かつた東條一堂先生に就て支那の經書を研究した。斯ふした間に琳瑞の名は國主大名若くは旗本の間に高まつた。そうして和上の人となりは、温厚謙柔、風骨峻峭、しかも能く人を容るゝの雅量を具へ、その愛國護法の熱誠に至つては、悲憤慷慨、侃々愕々、更らに假借する所なく、もつぱら正に歸して後に止むといふ態度であつた。であるから當時の名士は、其風を望で爭ふて交を求むといふ有樣であつた。

時偶まま幕末の際で、天下を擧げて尊王攘夷の議論の沸騰した時であつた。和上は斯る國事難艱の時に際しては、志士の精神修養を第一とせねばならぬといふので、大に精神修養の事を說いた。であるから有志が時々處靜院に集つて別時念佛を修し、その間に精神の鍛練、信仰の培養を熏練した。彼の有名な山岡鐵舟は、和上の道を聞いて劍法が益々上達し、常に和上を敬慕して、その師と稱して居た位である。又上の山の傑士金子與三郎の如きは、常に和上の敎を受けたが、彼が薩藩の邸內で斃れた時に、左腕の奧に珠數をはめて居たといふことである。この珠數は和上に貰つた記念品であつたといふことだ。又伊勢守高橋泥舟は槍術の御指南番で天下我が右に出づるものなしといふ勢であつたが、最も深く和上に敬服して、常に親交を續けられた。其他關口權介、那珂通高、橫田謙三郎等憂國の士が、和上を訪問した事は、一日平均七十餘人に及んだと傳へられてゐる。これによるも如何に和上が國事に忙殺されたかを察することが出來る。

琳瑞和上と高橋泥舟と親密になつた動機に就ては、甚だ趣味ある物語がある。その事は泥舟自ら時々人に語られたが、また泥舟遺稿の中にも記されてある。その大要は次のやうである。

琳瑞の事ですか、あの和尙は頭こそ圓めて居りましたが中々の豪傑でした。佛敎は申すに及ばず總てに就て達觀靈活の眼を具へて居りました。彼は正しく私の師匠でございます。惜むべし彼は四十歲にも及ばずして、不幸にも刺客の手に斃れましたが、誠に惜むべき偉人でありました。彼が慶應三年

十月十八日、態々私の宅を訪問されて、熱心に國事を談じ將に歸んとするに當つて、私は篤くその厚意を謝し、特に門人齊藤貢なるものに命じ、處靜院へ見送らせました。歸途和尚が三百坂(小石川)にさしかゝると、突然刺客の松岡丙九郎、廣井求馬の爲に暗殺されて、可憐の最後を遂げられました。時に年正に三十八歳だ。其處で齊藤貢は奮然として直に拔刀して二人に迫り、終に彼等を斫り斃して其讐を報ひ、其足で血刀を提げながら私に急報して來ました。其處で私は直に山岡鐵舟と與に現場に駈け付け、和尚の遺骸を處靜院に送り、厚く葬つて置きましたが、一體琳瑞和尚は中々の非凡な人で學問の如きも當時には全く稀有な人で克く內外に通じ、宗門に於ては持律嚴正で俗僧の到底眞似だも出來ない人でありました。加ふるに勤王憂國の俊傑で、眞に惜しむべき人でしたよ。

ところが私が此琳瑞和尚を知るやうになつた由來がありますから、少し申上ましやう。元來私は佛敎嫌で、坊主などといふ者は、互に話をすることさへ心好しとしない方でありましたが、元治元年の二月琳瑞が突然私を訪問して、私に面會を求めたから、私も扨てあの坊主め來やがつたなといやな氣もしましたが、折角人が訪問したといふのに、無下に追ひ返すといふは禮でないによつて、一先づ自室に通して面會して見ました。すると彼は慇懃に禮をとつて言ふには、先生は有名な槍術家と拜聽して居るから、今日は突然ながら先生の槍法の試合を是非拜見させて預きたいと思ひます。切に希望の餘り推參致したのであるが、どうぞ一場の御手際を拜見させて下さいといふので、私も心よく諾して

直ちに自ら仕度をし、門人の中の高弟を召して試合の用意をなさしめ、幾多の門人を集めて教授にかゝると共と、和尚を道場に導きました。すると和尚は私の教授の工合を肅然と見ておりました。因て私は一先づ教授を卒へて、和尚の身邊に往つて、拙者の槍法を見られましたかといふと、彼は謹んで拜見しました、先生の槍術は眞に神妙であつて、傳へ聞きしよりも其の實際の勝るゝことは萬々であります。譬へば佛如來の世間に出現して天魔を降し、最正覺を成就して一切衆生を救濟し給ふ境界であるやうに思はれました。夫故に更に一歩を進めて大機大用を得るの境に達せられたならば、最早やこの上もない事と思はれますが、唯今少しでありますといふので、此の坊主め、變なことをいふ奴だなと思ふたが、まて〳〵萬一拙者が怒氣を露したならば、滿場の門人がワット一時に起ち上つて、迷茶苦茶に琳瑞を擲り散らすに違いない、そんな事になると、それこそ他日赤面するやうな事がないでもないと思ふて、怒を押へて、貴僧の見る所ではそうであるが、和尚には定めて長所もあるであらふそれでは篤と御伺ひ申さうとて、唯獨り彼れを私の茶室に導いた。それから私が、貴僧は私の槍術に於て、何の見る所があつて、更に一歩を進めて大機大用を得ると申されたかと尋ると、彼れは答へて衲から先づ先生に御尋しやう、先生の槍術は妙ではあるが、始終を一貫せぬものがあると思ふ。それは外ではない、先生の槍頭が出沒する毎に、之は稽古じやと思ふ心がある。若しその槍頭に眞の鋒を用ひて眞劍勝負の場合となつたならば、大に趣を異にするものがあるでありましやう、斯く申すも先

生終に臨んで心中忽焉として、思慮せらるゝものがあるが如きは、是れ如何なる義ぞやと遣りかけて來ました。この一言は他人には、馬耳東風かも知れませぬが、當時私の身に取つては、恰かも頭上に鐵鎚を加へられたかの感じを生じました。そこで私は和尚に向つて、いや〳〵いかにもその通り、和尚の靈眼どうしてそんなに敏捷でありますかといふと、和尚は更に、古人のいふた事がある。毫釐も繫念すれば、三途の業因瞥爾として情生じ、萬刼の羈差なりと、無念無住無修無證、面前に闍梨なく此間に老僧なく、有にして無、無にして有、兩頭撒開して中間放下し、一念不生にして始めて自由自在の分あらんと論じ下しましたが、私は彼が此方の槍術に對し、且つ此方の問ひに對し、前後を一貫して見ると、彼は中々卓識を具へて居ると認めましたから、連席に彼に膝を折つて、嗚呼今日圖らずして和尚に遇ひ、求めずして佛教高深の道理を聞くことが出來たのは意外の幸福であつた。今日からは貴僧を私の師匠と仰ぎますから、どうぞ貴僧は將來佛教の眞理を以て、拙者に槍術を教へて下さいといふと、彼は私に向つて、先生は鬼神自在の人だとて大に喜び、私の意を悉く領して去られました實は最初和尚が變なことを言ひ出した折には、若しこの坊主が己れの問に對して曖昧なことでも言やがつたなら、忽ち頭上に鐵鎚でも加へて、痛く將來を誡めてやらふと思ひの外、飛然として此方の頭上を打越して、高深探る可らざるの人であつた事は、實に私は此の時膏肓の病に一針を與へられたかの感じを起しました。爾來私は彼を師として時々往來し、彼のいふ所を聞いて、自分の槍術を必死練

磨すること約三年の後、一夜大夢の中に、亡兄山岡靜山と相會して、槍法の秘談をなし、亙に數十本の試合をして、其較技の中に釋然とじて自悟し、爲に兄も大に喜んで決別した夢を見ました。夢が醒めて後自分にも、之はと思ふ所があつて、その日に直に之を技に試みましたが、いかにも夢中に自悟した事が、今日實際の技に應用して、眞に虛妄でなかつた事を省悟しました。その時自らこれは眞に無敵の極意を得たと思ふて、嬉しくて耐らぬので直ちに走つて處靜院に往き、琳瑞律師に見へて所存を述べやうと思つた所が、圖らずも和尙の方から問答が始まつたので、之は好機であると思ふて、直ちに所見を啓いて、拙者今日竊かに貴僧方の道と拙者の槍術とを拜べ判じて見ると、貴僧方の道は恰も障子一重の隣室に、小野小町や衣通姫が、ホヽヽ、ハヽヽと媚聲を發して居るのを聞きながら、イヤ〳〵彼等の爲に煩惱を起してはならぬ、戒律に違ふことになる、それでは佛になれぬと御修業なさるのが貴僧方の道と申さるゝ樣である。拙者の槍法から之を見る時は、大に其趣を異にしてゐる。拙者輩は小野小町や衣通姫の雪の肌をも遠慮なく抱き寢もすれば、或は腰卷やら中着上着と着け揃へて仕立をしてやつて、立派に仕上げてやるのが拙者輩の道であると物語りました。すると琳瑞がィヤ今日からは先生は私の師匠だといふて、痛く私を賞讃されました。併し之も唯私の經歷でござんすから、有りのまゝを御話申すのであります、何も私の自賛と思はれては困ります。總て私の話は、有のまゝを申すまで聽者の方で、酌量して貰はねばなりません。私が琳瑞と交つたのは、單に佛敎を學ぶの師

ではありません。實の所を申せば、彼は坊主とは申しながら非常な氣慨を有ち、加ふるに非凡な憂國家でありましたから、當時私は特に彼に謀るの必要を感じ、彼も亦私に談ずるの適當なるを知つて、水魚の交をして居つたのであります。然るに不幸なるかな彼は不慮の毒刄に、非常の最後を遂げたのは、親に別るゝよりもつらく感ぜられました。

已上は野澤僧正や泥舟氏の話である。これに依つて琳瑞泥舟兩人の關係などがよく解る。そして琳瑞の主張は公武合體說であつた。佐幕黨にも非ず、攘夷黨にも非ず、所謂擧國一致の議論を以て、天下の志士を說いたのである。當時米國丁督と幕府と條約を締結したと傳へらるゝや、天下は騷然たるものであつたが、特に水戸の浪士の如きは、甚だ不穩の形勢を示すに至つた。この時和上は井伊大老を訪問して、時事を談じて懷中から一書を出し、是を大老に差上げた文は今殘つてゐる。然しながら其要領は、當時の時世を諷したものである。外國は今や東洋に羽翼を延さんとしてゐる。この場合には決して輕卒なる條約を結んではならない。目下我國の狀態は公武互に意志の疎通を欠いてゐる。この一大事變に際して國內の一致を欠くことは、極めて危險であるに依て、公武合體。擧國一致で以て外國に當らねばならぬ。そして完全なる條約を結んで、國家百年の計を立てねばならぬ。今や議論沸騰して、大老の身邊は日一日と危險である、早く隱退して大老の位を空にし、それを口術として條約の締結を延期せよといふ忠告であつた。和上の見識は流石に中庸を得た高見であつた。是は然し佐幕

黨とも談論し、攘夷黨とも深交のあつた結果であらふ。此の言には井伊大老も甚だ感動したらしい。この時大老が答へて言ふには、予も貴僧と同意見である、然しながら今となつては、既に阿部肥後守等と米國提督との間に、堅い條約が成立してゐる折柄、予が今どうすることも出來ない場合であると答へた。そこで和上はそれでは條約の意のある處を洩して呉れと迫つた。所が大老は、これは總て祕密に屬してゐる事で、誰れにも發表することは出來ない、予は世間から誤解されてゐる。又誤解を招く措置を取らねばならぬ立場に立つてゐる。命は唯天に任すのみ、若し此身に變のあつた場合は、貴僧の念佛に依つて瞑するのみであるといふた。和上は大老の決心の到底動かす事の出來ないのを見て歎息やゝ久くして歸つたが、その後和上の許に匿名で斬悍狀を送つたものがあつた。和上は之を見て國家の大事が遂に誤らるゝやうな事はないかと心配して居る內に、彼の櫻田御門で井伊大老が殺されたといふ報があつた。

和上の許に匿名で斬悍狀を送つたのは恐くは水戸の浪士であらふ。浪士が井伊の大老を斬るべく豫告したのは、實は和上に大老を道理で壓迫し、條約を中止させやうと企てたのであらふ。然しながら大老は少しも聽き入れなかつた爲に、あの事變となつたのであらふ。是れから考へて見ても、水戸の浪士も强て大考を殺したくはなかつた、幾度か反省さする方法を講じたが、遂に及ばなかつた爲に、止むなく大事をしたのであらふ。然しながら大老が、如何なる忠言も聽き入れずに、死を決して事に

當つたその意氣も、亦た尊敬せねばならぬ精神である。然しながら井伊大老が、和上の言の幾分を用いた事も亦事實である。それは幕府が水戸侯の幽閉を、解くに至つた一事である。先に水戸の藩士等が、尊王攘夷を主張して、其勢實に當る可らざる時に際して、井伊大老は志士を捕縛し、且つ水戸侯を幽閉せしめた。この時山岡鐵舟は和上を訪ね、和上に向つて水戸侯解幽の運動を托した。和上は直に之を引受けて。閣起に向つて說いていふには、大河の流れは一手を以て能く支ふべきものではない今日の時世に水戸侯を幽閉するやうな事は、徒らに志士を激昂せしむるのみで、決して策を得たるものではない、早く之を解除なさいと忠言した。幕府の閣老も此議論には大に覺醒して、遂に水戸侯の幽閉を解くに至つた。水戸侯も是から和上に重きを置くやうになつた。

此の如く和上の名聲は益々高くなつて來たが、それが爲に和上は種々の嫌疑を受けねばならぬ運命を持ち來した。それは畢竟和上が水戸侯と接近した爲に、反對の佐幕黨の誤解を招いたからである。所が和上が好んで水戸侯と接近したのは、その持論の公武合體擧國一致を實現せんと企てたに外ならぬ。併し是れが佐幕黨をして誤解せしむる基となつたのは、その當時としては無理もない事である。だから知人が此形勢を見て、和上の身邊を危んで、一旦江戸を去つて、奥州の無能寺に赴く事を勸めたが、和上は笑つて左の一詩を賦して示したといふことだ。

盤中一朶峴、突出勢嶮轗、松潛千秋色、蘿纏萬丈危、靑苔紋絕壁、躑躅蟠險崕、更競勢無止、吾

不居巷僖、

斯く和上は徐ろに口を開いて、僧は死人の取扱者ではない、死人の取扱は穢多でも宜し、僧は國事多端の秋に於てこそ衆生濟度の心要がある。一旦世を去つた吾身は、今日となつてどうして死を惜まふかと言はれたといふことだ。けれども骨肉の縁は捨て難きもの、その身の死地に臨みつゝあるを知つて、一書を認め之を兄の與左衛門に送られたものが今殘つて居る。

桑折へ書狀差出候序啓上仕候、愈々御勇健奉賀候、世の中一變致し夫故愚院なども大嫌疑を受け、過月中は出入之者共御問合有之、尙種々御尋被成候へ共、公の御爲をこそ思へ、御叱を蒙る可き譯無之義故、漸く御疑も晴れ候也、何に付ても歎息の外無御座候、此上は天下の爲に御經讀誦し奉り候より外無之と存候　草々

十一月二十五日　　祥道琳瑞

細谷與左衛門殿

今また外にこの後の正月の年頭狀と思はるゝ書翰が殘つてゐる。

改暦の御慶申上候、愈御清健御迎齡奉賀候、愚院無異加年御休慮奉仰候、

一舊冬山口伊藤氏歸鄉に附し、御經差送夫々御屆被下候半、別て米澤屆け御手數奉謝候

一同便之節清淨心院前へ申上げ小楠公矢筆の和歌差上候筈、是又定て相屆き候半、當節になりては

難得ものに御座候、永く御家寶に遊さる可く候、

一青柳御老母御命終の内、田原先生何程か御力落被成候半、斷腸の思今日我身に比況し思想無量に候、宜く御通聲奉希候、

一當院追々穩に相成此節は浪人噂も相止申候、尤も長州彌降參の由別家吉川の周旋盡力に出候也、偏に神君の餘德爾かせしむる所か難有事に候、

一昨夏已來愚拙も大に嫌疑を蒙り、内々御尋の義等有之、露も後暗事之とは申し乍ら、如何なる災に逢んも難斗實は決心罷在候所、潔白の義御分り成され候か、其後は何事も無之候、後にて承候得ば、諸有志蔭にて大に盡力有之候由也、御安心奉希候、申上度儀山々に候得共、書中に述る事能はず、隨時折角御厚厭是のみ奉至禱候、恐々頓首

正月十七日　　祥道

細谷與左衛門様

和上の考へは佐幕にも攘夷にも偏らず、而かも兩黨に接近して擧國一致を謀つたのである。それが爲に屬々危險が其身に迫ることは免れなかつたが、固より一死以て國に殉するの覺悟と勇氣とは忘れなかつたから、心の内には少しも恐れはなかつたのである。和上の人格の偉大さもまた之に依つて知ることが出來る。そしてその後遂に刺客の爲に殺された。

和上の變死の顚末は斯ふである。一日和上は高橋泥舟を邸に訪ひ、時世の非なることを慨き、明日水戸侯に面會して、水戸侯から添書を得て京都に上り、上奏文を上らふと思ふのだが、是にはどうしても貴殿の賛成を得るの外はない、是非共同道して貰いたいと勸められた。所が泥舟はそれは尙ほ早いに依つて、暫く成り行を見るがよいと主張し、和上は早いも遲いもあるものか、時世は人爲を以つて多少の變化を持ち來すことが出來る。何事も萬事國家の爲ではないか、一日遲るれば一日の損があると主張し、激論數刻に亘つた後、遂にその事を決せずして、夜の十二時を過た頃、泥舟の邸を辭し去つた。この時泥舟は、深更に歸るの危險なることを告げ、一泊されんことを勸めたが、和上はそれを聞き入れなかつた。そこで泥舟は齊藤安之進といふ青年を御供に遣はし、途中を警戒せしめたのだ和上は網代笠を戴いて、白の絹布の綿入を着し、草茶色の袈裟を掛けてゐられたが、途中で果して刺客に逢ふた。刺客といふのは、廣井求馬松岡丙九郎の二人で、何れも劍客として聞えた者である。廣井は先づ和上を見て、後から大刀を振り下したが、鍊達の手腕丈けあつて、笠を切つた刀先は、右の鬢から肩先に懸けて、七寸餘りを切り付けた。和上はこの時少しも騷がず、南無阿彌陀佛と唱へて其の場に斃れた。そこで廣井は直に和上の首級を取らうとした刹那、供の安之進は拔刀して走り寄り、廣井の右の腕を斬り付けたので、廣井は其場に尻餅をついた。所が刺客の一人松岡丙九郎は、之を見て安之進に切り懸り、安之進と刀を交へたが、どうした事か松岡は、右の鬢を切られて遁走した。一

方は有名なる劍客、一方は僅かに十七才の青年であるにも關はらず、かの劍客に痛手を負はせたといふ事は、實に立派な手際であつて、一心の力の能く成し遂げた所である。安之進は松岡を逃した事は實に殘念であつたが、きつと和上の首を取りに來るに違ひないと思ふて、杉の木立の中に身を潜めて息をこらして樣子を窺つてゐると案の如く、松岡が忍んで來て和上の首を落さうとしたので、安之進はすかさず後方から切りつけた。松岡は痛手を負んで遁げ去つた。安之進も亦數ヶ所に痛手を受けて血に染つたまゝ、直ちにその事を泥舟に通じた。泥舟は山岡鐵舟や處靜院にその事を通じた。其時既に廣井は斬られ場所で死んでゐた。松岡も亦宅に歸つて後直ちに死んだといふことである。

泥舟鐵舟等は、直ちに和上の屍を處靜院に運び、行誠上人及び親戚の代理伊藤四郎等と協議の末、密かに葬式をすましたが、身僧籍にありながら國事に奔走して、遂に暗殺されたといふのは、聊か憚る所があるといふので、極めて內々に葬り終つたのであつた。將來大に望を囑した行誠上人の悲嘆の程は、實に一方ならぬものであつた。そして其年の十二月には、王政復古の大令下り、翌年九月改元して明治といひ、遂に維新の大業が成就した。嗚呼琳瑞和上をして、この鴻業を見せしめたならば、どゝなに喜ばれた事であらふ。